

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381328

研究課題名(和文) 発達障害のある大学生支援のための包括的アセスメントシステムの構築と実践

研究課題名(英文) Construction and practice of a comprehensive assessment system for supporting developmental disorders university students

研究代表者

吉田 ゆり (YOSHIDA, Yuri)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：20290661

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害学生支援に有用な包括的アセスメントシステム構築を目的とし簡易スクリーニング尺度の作成とバッテリー、支援の検証を行った。

質問紙検査7種を大学1年生250名に実施(2月)、発達障害リスクと社交不安障害、大学生生活不適応感項目において高い相関を示したことから、鑑別診断的項目、不適応感を軸とした発達障害スクリーニング尺度を作成した。またASDリスク高7名(支援群)に1年間の面談を行った結果、困難は現存・継続するが修業は維持されたのに対し、ASDリスク高7名の統制群は修業に明確な課題(GPA低下や修業中断)が生じたことが示された。これらの結果を踏まえ包括的アセスメントシステムモデルを提示した。

研究成果の概要(英文)：For the purpose of constructing a comprehensive assessment system useful for supporting university students with developmental disorders, the screening scale was created and the results were verified.

We conducted seven questionnaire tests for 250 first-year students (February), showed a high correlation between developmental disorder risk, social anxiety disorder, and college life maladaptation items, so that differential diagnostic items and mismatch Axis developmental disability screening scale. In addition, as a result of interviewing 12 people with high development risk (experimental group), 1 year, improvement of the difficulty existed and continued, but while training was maintained, support was implemented There was a clear problem (GPA decline and leave of absence) occurred in the group that did not have developmental disorder risk (severe ASD risk: control group) after the first grade. Based on these results, a comprehensive assessment system model was presented.

研究分野：特別支援教育、発達臨床心理学

キーワード：発達障害 大学生 アセスメント スクリーニング 尺度 支援システム

1. 研究開始当初の背景

障害学生支援に関しては、高等教育機関における特別支援教育の重要性の高まりがみられ、大規模調査研究や事例研究をもとに学生支援事業や教員啓発研究の端緒にある(国立特別支援教育総合研究所:2013、日本学生支援機構:2013)。しかし実証的研究の蓄積が十分ではなく、今後さらに質の高い、研究に基づく支援が求められることは自明である。

特別支援教育においては個別の教育計画の立案が重要であるが、発達障害のある大学生についての個別教育計画(以下 IEP)研究の実証的研究は始まったばかりである。IEP 作成には、アセスメントが必須であるが、我が国では大学入学時に既に診断及び支援を受けた学生ばかりではなく、むしろ入学後に様々な課題を呈することも多く、高校までの IEP を引き継ぐことも難しい(高橋:2012、松崎:2013)。先進国である米国に学ぶものは多いが、現在の我が国特有の青年期発達障害の現状を踏まえた大学版 IEP 作成、そのためのスクリーニングを含めた一貫したアセスメントが重要であると言える。近年の研究では、スクリーニングとしては、本人の困り感測定尺度の作成(山本・高橋:2010、岩淵・高橋:2011、佐藤・相澤・郷間,2012)、既存のチェックリストの評価研究(特総研,2013)、その他精神健康度調査(UPI 評定尺度版、以下 UPI)を用いてのスクリーニングが提唱されている(高橋,2012)。IEP 作成のためのアセスメントとしては、吉田(2012、研究業績 4)の構造化面接ツール研究の他、網羅的提案あるいは学生個々に応じた支援というコンセプト(高橋,2012)が提唱されており、体系的なシステムは見当たらない。以上のように、単一領域のスクリーニング尺度の開発、既存のアセスメントツールの活用、特定の支援プログラムの実施等、研究の緒についたところであるが、スクリーニングから支援計画立案までの一貫したアセスメントシステムの実証的研究は見当たらない。

2. 研究の目的

本研究の目的は発達障害学生支援に有用なスクリーニングから支援計画の作成、支援の導入、効果検証までの、包括的アセスメントシステムを構築することである。

3. 研究の方法

研究は3段階にて実施した。

(1) 研究1:スクリーニング尺度の検討

研究1の目的:大学生活を1年間経験した1年生に既存の質問紙によるテストバッテリーを実施することで、発達障害学生スクリーニングに必要な内容検討し、尺度作成の基礎資料とする。

研究協力者:研究代表者が担当する授業科目の履修者500名(研究テーマに関連し、研究の主旨の説明が十分可能な授業科目に限

定)のうち同意が得られたもののうち1年生229名。

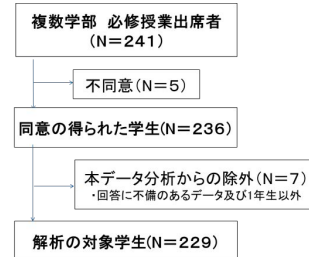


Fig.1 対象者選定の手続き

手続き:発達障害リスクのスクリーニングを目的とした質問紙調査7種(市販された検査、あるいは先行研究にて信頼性・妥当性を検討された検査)を実施した。

- ・調査期間:201x年2月〇日一斉調査。
- ・調査方法:関連授業時に一斉に配布し、学生に自記を依頼、終了後その場で回収した(回収率95.4%)。データが不完全なものは分析から除外した。

分析

・複数の質問紙で構成されたテストバッテリーを行い、発達障害のリスクを検討する。作成したテストバッテリーをTable1に示す。青年期の自閉スペクトラム症(以下 ASD)の判断として評価の高い自記式の質問紙である AQ-J を軸に、臨床的に鑑別が難しいとされる社交不安障害を判断する検査である社交不安障害検査(SADS)、発達障害大学生のスクリーニングに関する先行研究の中から発達障害関連困り感質問紙(信州大学版)(以下、信大版とする)、大学生生活の不安を判断する標準化検査である CLAS(大学生生活不安尺度)、生活の質(QOL)に関する自己認知を測定する自記式質問紙である WHO QOL26、ストレス状況に対する対処行動を計測する自己式質問紙であるストレス状況対処行動尺度(CISS)の6種で構成し、実施については協力者に負担のないよう、40分程度で実施できるような構成とした。得られた結果を、AQ-J を軸に各検査結果との相関を考察する。

- ・AQ-J 得点と各検査及び GPA 得点(1年後期)の相関
- ・SADS 得点、ASD 得点による3群(高中低)の層別化解析(分散分析)

Table 1. テストバッテリーの内容

検査名	出典
社交不安障害検査(SADS)	貝谷,2009
自閉症スペクトラム指数日本語版(AQ-J)	若林ら,2004
発達障害関連困り感質問紙(大学生生活に関する困りごと調査)(信州大学版)(文中では信大版とする)	高橋ら,2014
CLAS(大学生生活不安尺度)	藤井,2013
WHO QOL26	WHO,1997
ストレス状況対処行動尺度(CISS)	Endler,2012

(2) 研究2：スクリーニング結果の検証と支援ニーズの評価の統合

研究2の目的：研究1のスクリーニング結果を基に発達障害リスクのある学生のうち同意を得られた学生に面接し、大学における包括的な支援計画を作成する。さらに同意を得られなかった統制群との差異の検証を行うことでその特徴を明らかにする。

研究協力者：研究1及び201X+1年に実施した追加検査の結果発達障害リスク有とされ、かつ研究に同意した学生。14名で開始した(ASDリスク7名、ADHDリスク5名、他2名)(以下、支援群とする)。

手続き：研究協力者に面接を行う(実験群)。さらに面接に非同意であった学生を統制群(7名)としての研究1で得られたスクリーニング結果を実験群と比較検証する。

分析：既存のテストバッテリーの群間比較。さらに支援ニーズに焦点して学生生活状態の評価を行う。

(3) 研究3：支援試行によるアセスメントシステムの検証

研究3の目的：研究2で作成した支援計画をもとに支援を調整し、定期的に面接を行うことで支援効果を検証する。

研究協力者：研究2の支援群のうち、ASDリスクと判断された7名を対象として協力を依頼、同意を得た。

手続き：研究協力者に1年間のフォローアップ面接を実施した。

- ・面接期間：201X年9月～201X+1年9月
- ・面接の構造：面接回数は定期的に設定し(6回)必要であれば希望に応じて追加面接を妨げないこととした。面接内容は、修業及び生活に関する状況確認を中心とし、1回1時間程度とした。また、学内の他機関による支援状態についても、本人の同意を得て情報を共有した。統制群7名については、1年後に現状確認の面接を1回のみ実施した。面接は原則として代表研究者が実施した。

4. 研究成果

以下、研究1～3のそれぞれの成果及び総括の成果について述べる。

(1) 研究1：スクリーニング尺度検討の成果

ASDとSADS、GPA、信大版の相関により、スクリーニングの要素として鑑別の見立て、学業成績を中心に分析を行った。

	SADS	1年前期GPA	AQ-J得点	困りごと調査(ASD)	
				対人的困り感	自閉的困り感
1年前期GPA	-0.01				
AQ-J得点	0.43*	-0.03			
大学生活に関する困りごと調査(ASD)	対人的困り感得点	0.52*	0.04	0.60*	
	自閉的困り感得点	0.51*	-0.06	0.58*	0.64*
	困り感項目得点	0.57*	-0.02	0.65*	0.87*

ASDとSADS、GPA、信大版結果の相関

ASDリスク判断ツールであるAQ-Jと社交不安障害検査(SADS)、信大版検査、1年前期GPAとの相関を検討した(Table2)。その結果、AQ-J得点とSADS、AQ-J得点と信大版結果には相関があることが分かった。特に信大版では、対人的困り感得点も高かった。よって、信大版のような大学生活に関する広範囲にわたる困りごとの有無を問うことが、スクリーニングには有効であると言える。また、1年後期のGPA得点とSAD及びASDリスクには相関はみられず、学業成績のみではスクリーニング情報としては弱いことが分かった。

ASDと社交不安障害の鑑別の見立ての困難

SADS得点により低・中・高の3群に分けて層別化し、ASD得点結果との相関を分散分析により比較検討したところ、どの群間にも相関が見られた。よって、社会不安障害リスクとASDリスクには相関があり、ASDと社会不安障害の鑑別が難しい、あるいは社会不安障害の背景にASDが存在する可能性も指摘できた。よって、ASDのスクリーニングにおいては、SADのリスクも念頭に置いたバッテリーが必要であるといえよう。一方でここには質問紙法の限界があると考えられる。面接法を含むアセスメントシステムの検討が必須である。障害鑑別には個別の面談は必須であり、質問紙は面接を念頭に置いてのスクリーニングとして副次的に活用することが望ましいといえよう。

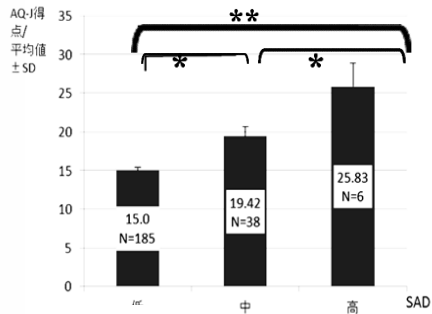


Fig. 2 SADSの重症度群とAQ-J得点
***P>0.001. **P>0.01

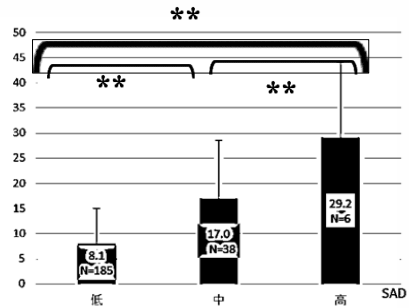


Fig. 3 SADSの重症度群と困り感質問紙得点
**P>0.001

GPAの採用には検討が必要であり学業成績のみでの判断には難しいことが示唆された。しかしながら本調査は第1学年後期であり、

この時期の学生の不適応感・支援ニーズは低いことも想定でき、これは今後の課題である。

大学生活への不安や不適応感と発達障害リスクの関連の可能性の検討（CLAS・WHOとAQ-Jの結果の比較）

層別化解析の結果を Table3、Fig.4~6 に示す。

Table3 Q-J 得点・CLAS・QOL・信大版の結果

テスト	平均値	標準偏差	下側95%信頼区間	上側95%信頼区間
AQ-J	15	8.0	15.2	15.8
CLAS	47.7	12.4	46.1	49.3
QOL	3.5	0.5	3.4	3.5
困り事	0.4	0.4	0.4	0.5

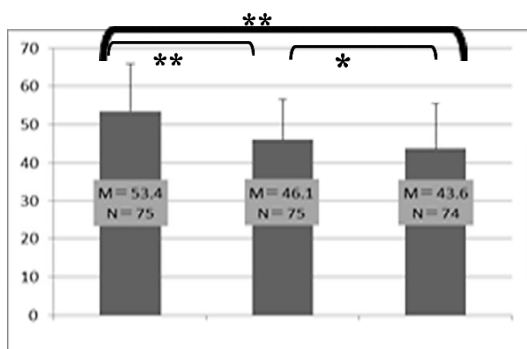


Fig.4 層別化解析 (AQ-J 得点と CLAS 得点)
**P>0.001 *P>0.01

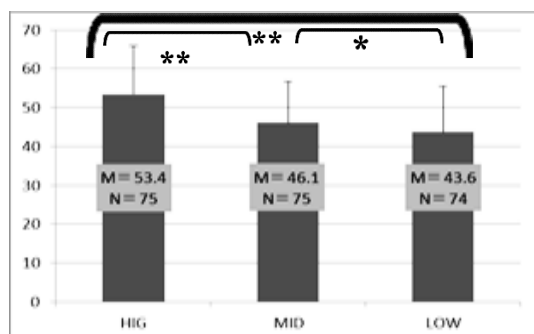


Fig.5 層別化解析 (AQ-J 得点 3 群と CLAS 得点)
**P>0.001 *P>0.01

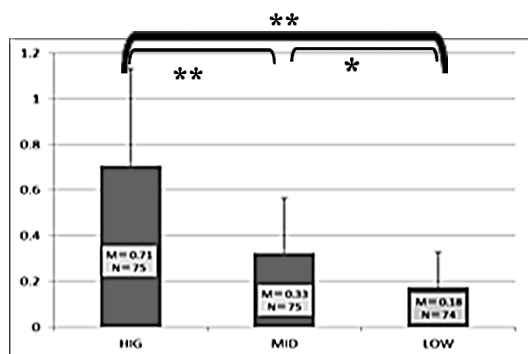


Fig.6 層別化解析 (AQ-J 得点 3 群と 困り感得点)
**P>0.001 *P>0.01

結果より、AQ-J 得点と CLAS 得点においては AQ-J 得点高群がより CLAS 得点が高い。よって、ASD リスクの高い学生が大学生活への不安・不適応感も高いといえる。

AQ-J 得点と QOL 得点からは、AQ-J 得点高

群がより QOL 得点が高い。よって、ASD リスクの高い学生は、大学生活を含む生活全般への不適応感が高い。AQ-J 得点と困りごと調査では、AQ-J 得点高群がより困りごと調査得点が高い。よって ASD リスクの高い学生は、大学生活において困り感を持っているといえることがわかった。

AQ-J 得点と各指標に高い相関及び有意差が見られたことから ASD 特性の高さと大学生活への不安・不適応感が高いことがわかった。よって、困り感の高さは ASD のスクリーニングの指標の一つになり得ると言えよう。また、テストバッテリーの構成には不安や不適応感を明らかにする指標が有効であると考えられる。不安や不適応感の自覚や所在を明らかにする面談等により、有効な支援へつなげる可能性が示唆された。一方今回は AQ-J 得点での比較であり、カットオフによるリスクの高さでは判定していないことなどから、リスク高事例別の検討も課題である。

研究 1 からは、入学後 1 年経過後のスクリーニングとしては、臨床的に鑑別が難しいとされる社会不安障害、1 年を経過した大学生活への困り感や不適応感、QOL に関する自己認知が重要であり、尺度作成に関してはこれらの項目が必須であると言える。

(2) 研究 2 : スクリーニング結果の検証と支援ニーズの評価の統合

支援計画の作成

研究当初からの大きな変更点と得られた知見として、研究当初には、発達障害学生を対象とした支援は端緒にあった。しかし、研究 2 に着手した平成 27 年には、4 月に障害者差別解消法の施行、7 月の発達障害者支援法改正により、大学内における障害学生支援体制は一層整備され合理的配慮の具体化が進んだ。本研究は研究代表者が在籍する長崎大学学生を対象としているが、長崎大学においても障がい学生支援室を中心に学内体制整備が進み、支援リソースとその連携が可能となりつつある。研究協力者の利益と福祉を考慮しても、こうしたリソースの活用が可能である場合には積極的に活用することが最善であろう。よって支援計画の作成は、学内体制を考慮し各部署が連携、情報共有することを意味した“包括的支援”とした。

上記を踏まえてスクリーニング結果を基に発達障害リスクのある学生のうち同意を得られた学生に面接し、大学における包括的な支援計画を作成した。

支援は、構造的な支援として、a. 診断・治療（大学病院及び外部医療機関による投薬、治療。）b. 臨床心理士による定期的なカウンセリングによる心理的適応や生活面での相談（保健医療推進センター）c. 大学での修業に係わる相談及び合理的配慮の調整（学部事務担当や授業担当者との調整含む）非構造的な支援としては、現状把握、居場所・調整機能として d. 本研究としての研究者面接、

e.担任等、f.教務的な事務を担当する窓口対応の6種とした。この6種について、面接により支援ニーズを確認した(Table4)。

	GPA	生活面			修学		
		人間関係	生活不適応	体調不良	学業不振	授業の配慮	実習の配慮
A	低						
B	高						
C	低			なし		なし	
D	中		なし	なし	なし	なし	なし
E	低						
F	高			なし	なし	なし	なし
G	高			なし	なし	なし	なし

さらに大学における包括的な支援計画としてリソース活用を中心とした支援体制の組み合わせを Table5 に示した。

なお支援群は、1年後期 GPA が 2.5 以上の成績維持者が 3 名、2.4 以下の成績低調者が 4 名であり、そのうち 2 名は 1.5 前後 (A・C) であったことから GPA 不振はスクリーニング指標とはなり得ると思われる。研究 1 と異なる結果であるが研究協力者の GPA 得点は、学部により平均値に差があることによると思われる。面接が必須であることが確認された。

	医療	保健医療推進センター	障害学生支援室	研究者面接	担任等配慮	窓口対応
	診断治療	カウンセリング	合理的配慮の調整	現状把握	居場所調整	調整
A						
B						
C			なし			なし
D	なし	なし	なし			なし
E			なし			なし
F	なし	なし	なし			なし
G	なし	なし	なし			なし

支援群と統制群との差異の検証

面接の同意を得られなかった統制群との検査バッテリー結果の差異の検証を行うことでその特徴を明らかにした。

2 群間の支援開始当時の検査バッテリー結果の再分析を行った。その結果、AQ-J 得点や社交不安障害得点は両群ともカットオフを越えているが、両群間の障害の重度さなどにおいての差はなかった。また、信大版においても差はなかった。

一方で、CISS 得点における情動優先対処と CLAS 得点において有意差がみられた。情動優先対処は、ストレス状況において情動的な反応をする(例えば自責的になる、不安を感じる、自分や他者に対して攻撃的になるなど)自覚があることを意味するが、情動的な反応の自覚が面接ニーズと関連することがしているとも言える。また、CLAS 得点においても

面接群は大学生活に対する強い不安が確認できた。さらに統制群は、健康診断未受診者 4 名、メンタルヘルス検診対象者 3 名(面接無し)であった。

よって、面接群においては 1 年後期の段階で、ストレス状況対処の方略において情動優先的対処を行う傾向があったこと、及び大学生活における困難を不安として自覚していた。課題解決を優先させるより情動面に重きを置くことは、他者への関心の高さや自己の感情の表出の認知を示している。

このことは大学生活における困難や不適応感というストレスを認知し、対処として情動的に他者に向かう、被援助志向性を示すとも考えられる。例えば、発達障害学生が大学での効果的な支援を受けるためには被援助志向性の高さが関連し、援助要請力が重要であることを示唆していると言えよう。

(3) 研究 3: 支援試行によるアセスメントシステムの検証

支援群は、面接回数は定期的に設定し 2 ヶ月に 1 回の最低 6 回を依頼したが、必要であれば希望に応じて追加面接を妨げないこととしたため、居場所的な機能を果たすこともあり、面接回数はそれぞれ 6 回~21 回となった。面接内容は、修業及び生活に関する状況確認を中心とし、各部署での支援状態をどのように本人が考えているのかを中心とした。また、必要に応じて各部署との調整と情報共有を行った。

統制群は、支援群の面接が終了してから 3 ヶ月以内に可能であれば聞き取りを実施した。

面接群の支援効果

面接群は、全員が構造度の異なる支援を複数受けることができた。大学生活に自己評価はすべて良かったとはならず、面接においても単位取得の滞り(4 名)、科目単位・実習での不適応(2 名)、人間関係やライフスキルの未熟さによる失敗など(7 名)が報告された。また共通した傾向として、自らが持っているストレスコーピングの項目が極端に少なく、居場所の作り方の下手さや、プランニングの失敗等の特性は確認された。しかし修業中断や進路変更に係わるような大きな困難は報告されなかった。一方、統制群 7 名については、全員に構造的な支援体制は確認できなかった。聞き取りの概要は以下の通りである。

これらのことから、支援群は、支援を実施

	GPA	生活面			修学		
		人間関係	生活	体調	学業全体	授業	実習
支援群	A	低					
	B	高					なし
	C	低					
	D	中					
	E	低					
	F	高					
	G	高					

したことにより、成績の向上や人間関係の劇的な改善といった効果は測定しにくかったが、修業に関しては一定の効果があったと考えられた。

Table7 統制群学生の状況及び聞き取り結果等

学生	状況と聞き取り内容
H	特に困難はなかった。
I	面接できず。単位不足のため卒業延期、実習中断あり。希望職種の変更が報告された。
J	休学中のため面接できず。実習中断のため再履修、単位不足が報告された。
K	大学においてうまくいったと思うことは何もなかった。希望職種は変更した。何とかやっています。
L	L：特に困ったことはなかったが自信はないままだった。相談すれば良かった。
M	M：何とかやれたかなと思う。友達が助けてくれたように思う。希望職種は変更した。
N	N：うまくやれてはいないのかもしれないけど困ってはいない。成績は悪いまま、希望職種は変更しようかどうか迷っている

(4)研究1～3の総括

研究1～3の結果より、総合的な考察と作成した尺度を含む包括的アセスメントシステムを以下に示す。

スクリーニング尺度

入学時からの支援の導入には困難の認知と被援助志向性が重要であることが分かったことから支援者側がスクリーニング尺度を実施する必要がある。また健康診断等の機会を活用したスクリーニング尺度を実施することが必要である。また、1年次終了時期においても、社会不安障害項目、大学生活不安、ストレス対処(身体、情動、課題解決)、不適応感の有無により簡易スクリーニングが有効である。

Table8 Check1入学時スクリーニング

健康診断に来ない	yes・no
メンタルヘルス検診対象	yes・no
面接に誘っても来ない	yes・no
面接ニーズがある	yes・no
GPAの不振	yes・no

Table9 Check2 1年終了時のスクリーニング尺度

1.成績が思うようではない	yes・no
2.大学生活はうまくやれている	yes・no
3.日常生活はうまくやれている	yes・no
4.身体の不調が続いている	yes・no
5.がんばっているが思うようでない	yes・no
6.よく分からない不安が続いている	yes・no
7.人間関係はうまくいっている	yes・no
8.気分転換の方法はたくさんある	yes・no
9.誰かに相談したいと思うことがある	yes・no
10.特に困ってはいない	yes・no

1～8に複数該当かつ9もしくは10に該当の場合(は反転項目)

包括的支援システムモデル

スクリーニングを実施した上で、アセスメント面接を行い、その結果により学内体制の調整を中心とした支援ニーズ面接を行うことが有効である。スクリーニングとアセスメントを中心とした包括的支援システムモデルをFig.7に示す。

第1段階：スクリーニング(入学時) Check 1

第2段階：スクリーニング(1年後期) Check2

第3段階：アセスメント面接(テストバッテリー)

第4段階：支援ニーズ面接

第5段階：支援の実施(学内複数部局の活用)

Fig7. 包括的支援システムモデル

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文](計2件)

吉田ゆり・田山淳・西郷達雄・鈴木保巳、
発達障害学生支援のためのアセスメントシステムの検討 ニーズの把握と鑑別の見立てに着目して - ,長崎大学教育学部紀要 教育科学,査読無,81,2017,173-181.
<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/handle/10069/5979>

吉田ゆり・田山淳・西郷達雄・鈴木保巳：
発達障害学生支援における修学困難要因の分析，長崎大学教育学部紀要 教育科学，査読無，81，2017，183-190．

<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/handle/10069/5979>

[学会発表](計2件)

吉田ゆり・田山淳・鈴木保巳：発達障害学生支援のためのアセスメントシステムの検討 - 自閉症スペクトラム障害と学校生活への不適応感の関連を中心に - 日本特殊教育学会，2016年9月17日，朱鷺メッセ(新潟県新潟市)．

吉田ゆり・田山淳・西郷達雄・鈴木保巳：
発達障害学生支援のためのアセスメントシステムの検討 - 社交不安障害と自閉症スペクトラム障害、困り感、GPAとの関連を中心に - 日本特殊教育学会，2015年9月20日，東北大学(宮城県仙台市)．

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 ゆり (YOSHIDA, Yuri)
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：20290661

(2)研究分担者

田山 淳 (TAYAMA, Jun)
長崎大学・教育学部・准教授
研究者番号：10468324

西郷 達雄 (SAIGO, Tatuo)
長崎大学・保健医療推進センター・技術職員
研究者番号：50622255

鈴木 保巳 (SUZUKI, Yasumi)
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：90315565